

花 き

実 況

1 キ ク

奥越の7月中旬の新盆咲きは、小ギクで「小鈴」「シューペガサス」「小紫」等が7月20日現在で出荷が始まっており、例年より7日以上早い。輪ギクで「スーパーイエロー」「星の輝」等が出荷中である(7月13日調査)。日量約150~400箱で7月下旬がピークと予想される。

今年で10回目を数えるJAテラル越前キク部会品評会は7月24日に審査が行われ、25日まで大野市のショッピングタウンで展示が行われた。本年度はキク部会設立10周年ということで、記念式典や記念展示が行われた。

また、7月8日付でJAテラル越前キク部会が北陸3県初、露地ギク産地としては日本初の「花き日持ち性向上対策品質管理認証」を受けた。

暮れ植え作型の「小鈴」122cm、「小紫」109cmで7月下旬に開花見込である。

病害虫では、梅雨期間中に黒斑・褐斑病が少~中発生、白さび病が3圃場で発生、黒さび病が6圃場で発生していた。アザミウマ類による葉や花の食害が中発生、オオタバコガによる被害は多発生である。

坂井の春植え8月咲きギクは開花が10日程度早く、草丈が全体的に短い。「小鈴」で70~80cmとばらつきがある。これは、暮れ植えに細い株が見られ、5~6月の降雨不足によるものと考えられる。「めぐみ」、「花絵」でアブラムシ類少発となっている。

福井の春植え8月咲きギクの草丈は7月8日調査で、福井北部の「花絵」が草丈96cm(121cm 昨年7月23日調査)、「小鈴」90cm(95cm)、「やよい」85cm(100cm)、福井東郷地区で「小雨」77cm(85cm)、「小鈴」87cm(90cm)となり、出蕾時期が10日程度早くなっている。

福井市南部「小鈴」草丈85cm(90cm)、「恋心」82cm(98cm)である。病害虫では、一般的にハダニ類やスリップス類が少発生である。

丹生の春植え8月咲きギクは、7月10日調査で「小鈴」草丈85cm(95cm、昨年7月16日調査)、蕾径10mm(10mm)、「花絵」草丈90cm(100cm)蕾径5mm(5mm)で昨年より7~10日早い開花になる見込みである。病害虫はダニ類、アザミウマ類、白さび病が発生している。

南越の7月9日調査で露地の「小鈴」草丈85cm(90cm)蕾径6mm(8mm)、「はじめ」草丈83cm(90cm)蕾径10mm(10mm)である。病害虫はダニ類、アザミウマ類が微発生している(昨年7月16日調査)。

二州の春植え8月咲き小ギクは、7月7日調査(昨年7月22日調査)で「秀光」が草丈71.2cm(昨年73.6cm)蕾径5.8mm(昨年開花始め)、「小鈴」が草丈74.2cm(昨年86.6cm)蕾径6.7mm(昨年立弁)、「広島紅」が草丈70.8cm(昨年95.4cm)蕾径3.8mm(昨年7.2mm)である。さび病が中発、アザミウマ類が少発である。9月咲き小ギクの草丈は、「しらさぎ」が草丈24.6cm(昨年53.0cm)、「映紅」が草丈21.2cm(昨年43.6cm)、「わかさ」が草丈15.8cmと、昨年に比べ生育は遅れ気味である。病害虫は、キクモンサビダニによる紋々病が少発である。

若狭の春植え8月咲きギクは7月9日調査(昨年7月22日調査)で、「翁丸」が草丈68.6cm(昨年75.2cm)蕾径7.7mm(昨年7.2mm)、「さきかぜ」が草丈67.0cm(昨年83.4cm)蕾径7.8mm(昨年9.0mm)、「くれない」が草丈61.8cm(昨年75.2cm)蕾

径 4.0 mm (昨年 8.4 mm) で、草丈は低め、開花は昨年より早めである。病虫害ではアザミウマ類、カスミカメムシ類が中発である。露地の 9 月咲きキクの草丈は 7 月 9 日調査 (昨年 7 月 22 日調査) で「みゆき」が草丈 44.8 cm (昨年 50.8 cm)、「楽園」が草丈 43.0 cm (昨年 44.4 cm)、「妖精」が草丈 51.2 cm (昨年 57.8 cm) 蕾径 4.7 mm (昨年 3.9 mm) で、病虫害ではアザミウマ類、カスミカメムシ類が少発生である。施設の 10 月咲きギクおよび電照の 11 月咲きギクは 6 月下旬～7 月上旬に定植した。

2 ユリ

奥越のシンテッポウユリ「オーガスタ」の切り下球根栽培は、7 月 7 日調査 (昨年 7 月 22 日調査) で草丈 110cm、出蕾はじめである。「エンドオーガスタ」実生苗は 53cm、35 枚、8 月中旬開花見込みである。葉枯病が切下球根栽培にみられる。

鯖江市で「リリブライトレッド」の球根を養成中である。4～5 月開花作型は 8 月に掘り起こす予定である。

3 スイセン

6 月～7 月にかけて球根掘り上げが開始され、7 月に促成球根処理が行われた。一部、燻煙処理をエチレン処理に変更している。8 月に抑制栽培の球根処理を行う予定である。7 月 11 日にスイセン改植ボランティア「花咲かそう」援農イベントが行われた。

4 トルコギキョウ

坂井の二度きり栽培は 7 月上中旬までに出荷された。「北斗星」「レイナホワイト」等が 80～100cm であった。7 月上旬は炭そ病や灰色かび病が見られたが、現在は落ち着いている。あわら市の生産農家で 7 月 6 日、付近の幼稚園児を迎えて収穫体験が実施された。

奥越の春植えされた「ロジーナスノー」は 44cm、12 枚で発蕾しており、7 月 20 日からの出荷が見込まれる。

南越の 7 月 9 日調査で晩生品種の「モレットマリン」「アンジェリーナ ブルーピコティ」「ブライダルスノー」が 93cm(88cm)で開花始めである。抑制栽培の 5 月 5 日播種、苗冷蔵した「なみだ」「モレットマリン」が 7 月下旬から定植見込みである (昨年 7 月 16 日調査)。

二州は美浜町の 5 月下旬定植の「ロジーナシリーズ」等が、7 月 7 日調査 (昨年 7 月 16 日調査) で草丈 20 cm (昨年 50 cm) となっている。

若狭では 5 月下旬～6 月上旬にかけて定植された「エクロサホワイト」「あすかの舞姫」等が、7 月 7 日調査で草丈 10～15 cm となっている。

5 その他

あわら市の電照アスターは 6 月下旬で収穫終わり、露地物はやや草丈が低く 50～60cm で 8 月上旬開花見込みである。大野市の「ローズピンク」は 90cm、8 月開花見込みとなっている。

越前市のストックは「カルテット」シリーズが 7 月下旬に播種予定である。

対 策

1 夏期の灌水・高温管理

- 1) 本年は、5月以降に好天となり6月は平年並みの気温が続き、一時的に降水がみられたが、7月上旬にはキクではマルチの中が乾燥している圃場も見られた。水分不足で肥効が悪く、急な降雨で逆に肥効が現れ、上部の葉が大きくなる株も見られる。この状態の時は根が弱っており、晴天時には萎ちようする現象が起こる。あわてて地温が高い日中に灌水すると、根を傷める危険性が高いため、夜間か日の出前の地温が低いときに灌水する。
- 2) キクでは生育後半に、上部の葉が小さくなるウラゴケ症状や、新葉がやけるカルシウム欠乏が出る株も見られる。マルチの一部を切って、穴をあけ、水を灌注する。灌水後の日中は排水溝に水が溜らないように、通路の再整備や溝を掘る等の排水対策を行い、根を健全に維持し、新根の発生を促すようにする。
- 3) 施設は日中に高温となるので、天窓、妻窓、裾窓を開放し、通風を良くする。また、換気扇、送風機等を設置して、ハウス内の空気を循環させるようにする。

2 秋植え夏ギクの苗づくり

- 1) 親株として用いる株は病害虫に侵されていない株とする。とくに、キクスタントウイルス、キクモンサビダニ（紋々病）、白さび病の発生兆候がある場合は適宜防除する。被害が大きかった品種は更新する。
黒さび病の発生がみられた地域では、ステンレス剤の予防散布を励行する。しかし、高温時（30℃以上）の散布は薬害のおそれがあるのでさける。カブラヤガの葉裏への産卵を抑えるため、適時防除するとよい。
- 2) 親株として用いる株は、採花前後も灌水、施肥、除草、防除管理を適宜行う。
- 3) 台刈り前には十分灌水を行い、1㎡当たりそさい5号で30g程度を施す。
- 4) 8月中下旬を目安に、親株を地上5cm程度の高さで刈り込む。

3 中輪キクのやなぎ芽の発生と処理

- 1) 9月咲ギクや秋ギクでは、7月下旬から8月上中旬に曇天、降雨などが続いた場合に発生する。定植時期が早い作型では発生しやすい。
- 2) 電照栽培では、停電などで3日間以上電照がストップした時や、電照期間が60日以上と長すぎた場合に発生が多くなる。
- 3) やなぎ芽の発生初期に1番上のわき芽だけを残し、不完全な蕾と他のわき芽を取り除く。なるべく早めに処置を行うことで、草姿がよくなる。

4 夏期の病害虫防除

夏期の農薬散布は、早朝か夕方の涼しくなってから実施する。また、農薬を複数剤を混用した場合や、植物体がしおれた状態では薬害がでやすいので注意する。夕方の防除であっても、噴霧直後は熱水が出やすいため、ゴム手袋越しに温度を確認して防除を行う。また、前の薬剤がハウス内に残っている場合があるため、最初の薬液は周辺の雑草等に試しかけを行う。薬害が出やすい農薬は薬剤履歴をよく確認して高温時の使用に注意する。

1) ハダニ類

薬剤は、抵抗性の発達を避けるため、系統の異なるハダニ剤を使用する。圃場の周辺の除草を行うことで隠れ場所をなくすることも重要である。特に7～8月は除草に手が回らないことが多いので注意する。

防除時は葉裏に薬液がかかるよう、噴口をななめ上向きとして防除を行うが、最下部はかかりにくいいため、防除前に除葉する。キクの花ダニ類薬剤は、スターマイトフロアブル、ダニトロンフロアブル、コテツフロアブル、ダニサラバフロアブル、カネマイトフロアブル等を散布する。多発時は必ず殺卵力のあるバロックフロアブル等の殺虫剤を用い、発生数を減らして、殺ダニ剤を利用すると効果がある。同一系統の薬剤の近接散布は行わない。

2) アザミウマ類

破蕾期前より薬剤散布する。破蕾後の蕾の中にアザミウマ類が入った場合、防除は著しく困難になる。

薄暮時の散布効果が高い。付近の雑草や切り残し花が第一次発生源となるので除去する。

キクを加害するアザミウマ類はミカンキイロ、ミナミキイロ、ヒラズハナ、クログエハナ等の各種があるので、種を確認した上で、薬剤を選定する。ミカンキイロアザミウマ等は、キクえそ病を媒介するので特に注意する。

ミカンキイロアザミウマには、アフーム乳剤、カスケード乳剤等を散布する。それ以外の種にはハチハチ乳剤、プリンスフロアブル等を散布する。

3) アブラムシ類

夏は一時的に数が減少するが、秋には再び繁殖する。葉裏で越冬する個体もみられる。時々葉裏をチェックする。

同一薬剤を連用すると抵抗性がつき、効かなくなるので、系統の違う薬剤を計画的に使用する。特に、ワタアブラムシは一生のサイクルが短く抵抗性がつきやすい。圃場の周辺から侵入するので、よく観察し、初期に駆除する。種類によっては、生長点付近のみ発生するもの、葉裏を主体とするものがあるため、同一方向での噴口の防除は避ける。

キクのアブラムシ類薬剤は、オリオン水和剤 40、ウララ 50 D F、アーデント水和剤等を散布する

5 スイセンの管理

1) 促成スイセンでは定植前から遮光ネット等を設置し、地温の低下を図り、発根と発芽を促すためスプリンクラーや灌水チューブ等による散水を行い、地温・気温を極力低下させる。畝間灌水の場合は発根部位（球根の根盤部）まで水が回るようにし、回ったらすぐ排水にこころがけ、停滞水がないようにする。

2) 季咲スイセンは、9月以降、乾燥した場合は、葉の長さを確保するため、用水が確保できる圃場では灌水を積極的に実施する。

6 ストックの育苗と初期管理

1) 播種後の管理は雨よけハウス等で行う。ハウスで管理する場合は、高温対策のためにハウスの屋根の外側に遮熱ネット等を張り、ハウス内の気温を下げる。育苗箱はベンチ等の上で風通しを良くし、灌水は地温の低い早朝に行う。

2) 八重鑑別後、葉色が薄い場合は、OKF-1などの液肥を施用する。育苗日数20日程度の若苗定植を心がける。

3) 本圃は、クロールピクリンやガスタード微粒剤で土壌消毒する。

4) 本圃は、定植5日前からハウスの屋根の外側に遮熱ネット等を張り、ハウス内の気温を下げしておく。2～3回に分けて十分に灌水して畝全体の水の通りをよくしておく。

- 5) マルチを張る場合は土壌水分が十分にあるときに、土面と隙間がないよう密着するように張る。隙間があると風であおられるばかりでなく、地温が高くなる。
- 6) 定植後は直ちに灌水し、液肥を施用し活着を促す。
- 7) 直播栽培では、立枯れ性の病害を予防するために有機質肥料の施肥は早めに行い、栽培床に十分灌水しておく。また、播種時の地表面の温度を極力下げるため、播種の5日程度前から70~80%の遮光資材をハウスの屋根にかけて、風通しを良くして地温の低下に努める。播種後は土を乾かさないように灌水し、発芽後は苗の徒長防止のため、直ちに遮光資材を取り除き、灌水は土の表面が乾いたら行う。
- 8) 立枯れ性病害が発生した場合は、被害株を抜き取り、病原菌を調べる。立枯病（リゾクトニア菌）では、発病株を引っ張ると地際からちぎれるが、ピシウム菌の場合は、引っ張ってもちぎれずに根がついてくる。立枯病（リゾクトニア菌）が発生した場合はリゾレックス水和剤を土壌灌注し、ピシウム菌が発生した場合はリドミル粒剤2を土壌表面散布する。

7 ハボタンの定植と初期管理

- 1) 切り花ハボタンは草丈を確保し、細く作り上げる必要がある。施設栽培の場合は、前作の肥料が残っている場合があるので、土壌分析を行ってから栽培する。露地栽培の場合は、基肥として石灰質肥料10~20kg/a、窒素、リン酸、カリを成分で各1kg/a施用する。
- 2) 本葉が2枚の若苗の時期に、12cm角ネットを使用し、1マスに1株植えつける。苗が老化する前に直ちに定植する。
- 3) 定植後、活着するまではしっかりと灌水をする。活着後は、土の表面が乾いたら灌水をし、草丈確保のため、乾燥しすぎないように注意する。